
レジェンド・オブ・一般ピーポー

忘却の彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レジェンド・オブ・一般ピーポー

【Nコード】

N5070T

【作者名】

忘却の彼方

【あらすじ】

一般人だったはずなのに何かなんだか分からない内に、鋼殻のレギオスの世界に逝ってしまった男が、今度こそ長生きしてやると死に物狂いでフラグを折る本末転倒な物語です。

始めはレジェンド・オブ・レギオスから始まりますのでこちらのほうが少し独自解釈や設定捏造があったりするかも知れませんが、ご容赦下さい。

超不定期更新に加えて鈍亀更新です。

初めての投稿で分からないところがあるかも知れませんが頑張りたいと思います。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

ブローグ

その時は突然訪れた。果たして何が悪かったのかは全然分からない。日頃の行いは悪くなかったはずだ。特別運が悪いわけでもない。とすれば偶然だったのかもしれない、あるいは運命だったのかもしれない。つまり何が言いたいのかというと通り魔に刺されました。こうグサツと左脇腹から抉り込むかのような角度で。不思議と痛みは無かったし、むしろこれまで生きてきた16年間で最高の冷静さだと思った。だが体そうはいかなかった。力が入らずその場にうずくまってしまふ。ああ俺死ぬんだな……ふとそう感じた。その瞬間全てが現実味を帯びた。麻痺していた痛みがやって来る。酷い鈍痛だ。冷静だった頭も死にたく無いという言葉で一杯になる。ナイフは抜いた方が良くかと思っただ、直ぐに刺さったままの方が良いと考え直す。ポケットから携帯を取り出そうとするが上手く取れない。焦って忙しなく手を動かし、ポケットをまさぐるがやっぱり上手く取れない。やっこのことで携帯を取り出す意識が朦朧となる。携帯のボタンを押し救急車を呼ぼうとするが、そこで意識が途切れる。

次のニュースです。この前からの連続通り魔事件に新たな犠牲者です。A県K高の高校生が腹にナイフを刺されて死亡するという事件が7時頃に起きました。この高校生は最後の際に携帯を握りしめて

おり連絡しようとした所で息絶えたようです。現在、警察からの詳しい調査結果を待つ状況です。

第一話 転生？トリップどっち何だろう。（前書き）

第一話です。まだ二日目ですが、投稿出来て良かったです。読者が待っている……すいません。誰も待ってませんね。調子乗りました。本当はもっと長くしたいけど携帯からなのですいません。短いですが、もしよろしければ感想を下さると嬉しいです。

第一話 転生？トリップどっち何だろう。

- まるで水面から浮かび上がる、というよりは引き上げられるかのような感覚がする。暗転していたかのように暗かった視界が色彩を帯び、明るくなる。未だぼんやりする頭で考える。(あれ……オレ死んだはずじゃ……) そこまで思考するがぼんやりとした頭では確りと思考出来ない。それでもしばらくすると、視界も安定し頭も冴えてくる。まずは、周りを見渡して見る。白いカーテン、白いタイルになんかの薬であろう臭いが覚醒したばかりの脳に直撃する。普段なら少し不快感を催す臭いであるが、死にかけて助かった身としては、それさえも生きていることを実感出来る素晴らしい感覚だと思った。そして怪我の具合を確認しようと、体を起こそうとしたらある違和感を感じた。何か動かし辛い。全体的にだ。例えるなら自分のイメージした動きと実際の動きが違うような感じ。それだけならまだ良かった。もしかして自分としては一瞬だったが、長い間昏睡状態だったのかもしれないからだ。だがそんな感じの動かし辛さじゃなかった。ベットの掛け布団をどかしてみ、気付いた。何かちっちゃい。ぶっちゃけると尺が足りなかった。もちろん絶叫を上げたオレは悪くないはず。誰だって起きたら体が小さくなってたら、何らかの奇行に走るはずだ。オレは叫ぶことを選んだだけだ。

- - 心此処に在らず。オレの現状を表すのにこれほど適した言葉は無いと思う。あの後、絶叫したオレだったが、その声を聞いた看護士さんが見に来た。そしてあれよあれよと言う間に検査の嵐。だがオレはそんなことに全く気にせず、何で体が縮んだのかを考えていた……が直ぐに理由が分かった。検査中に機械にうつすら映る自分の顔を見たら、なんと全く知らない顔の子供が居るではないか。右目を閉じて見る。奴も右目を閉じる。次に、唇の口角を上げてみる。奴がオレを小馬鹿にしたように口角を釣り上げる。……………こいつオレだ!?

そんなこんなでオレは体が縮んだのではなく、全く知らない誰かに憑依してしまったことに悟るのである。

第二話 これからの方針（前書き）

第二話です。お気に入りに入れて下さった方どうも有り難うございます。拙い文才で書いた小説ですが宜しくお願いします。

ちなみに第二話を読む前に補足です。主人公は、鋼殻のレギオスというかレジェンド・オブ・レギオスは知っています。ただまだ気付いて無いだけです。

面白いと感じたら、感想待ってます。

第二話 これからの方針

検査が終わったのはもうすっかり日が沈んだあとで、やっとベットに戻って来た。色々と分からないことだらけで理解が追いつかないが、分かったことが二つある。まずは、オレの名前だ。どうやらこの体の持ち主はルクライン・リライトという名前らしい。医者がそう呼んでたし、病室の名札をみた限り間違いないだろう。あと、もう一つは何故か外から見える景色がオーロラだったことだ。もしかすると北極に近いのかと思った。夜空いっぱい広がる光のキャンパス。何だか自分がちっぽけな存在に思えてくる。そこまで考えてあらためて病室を見してみる。（広いな……しかも個室だ）それにしても「暇だな」部屋の静寂に耐えられず、ついつぶやいてしまうが、そのつぶやきに反応する者は居らず空気に溶け込むように消え、静寂が戻ってくる。虚しい。それがオレの率直な気持ちだった。「寝るか」明日また考えよう。

起きてまず目に着いたのは、黒のスーツにサングラスをつけた一見くたびれた感じのサラリーマン風のオッサンだった。が身に纏う雰囲気は何やら物々しい。「ようやく起きたか」やや低い洪目の声で話しかけてきた。「お前は私のファミリーを継ぐんだ。そんな体たらくでは困るな」いきなり変なことをのたまった。内心の動揺を必死

に顔に出ないようにする。「ファミリー？」そう言うとうとうやらオレと関係の深そうなおっサンは、少し訝しげな顔をして「私の息子なんだから、継ぐのは当たり前だろう？」……取り敢えずこのおっサンがオレの親だということが発覚。だが重要なところが分からない。ファミリーって何ですか。それとなく聞いてみる。「継がないと駄目ですか？」するとおっサンの方からとてつもない威圧がかかる。「……私の代でアトラスファミリーを潰す気かね？このフォードノスシティで一番の勢力誇るマフィアを」何か凄く話しが飛躍して来た。マフィア？ファミリーってマフィアのことかよ！それよりフォードノスシティ？どこらへんなの？「フォードノスシティってどこらへんなの？」……頭でも打ったか？後内周都市郡の端っこだ」後内周都市郡？訳分からん単語が出てきた。流石にこれを聞くのはまずいか……。「まあ良い。取り敢えず体を治せ。詳しいことは退院してからだ」沈黙になるのが嫌なのか、単に時間を惜しんだのか知らないが少し早口で言う足早に去って行く。オレはただ去っていく背中を見えなくなるまで凝視していた。

第三話 第一回死亡フラグ（前書き）

三話です。やっと主人公がレジェンド・オブ・レギオスの世界に氣付きました。行き当たりばったりで書いている僕ですがクオリティだけは落としたく無いので（落ちるほどのクオリティは無いんですが）毎日更新では無くなるかも知れませんがどんな形であれ完結はしたいと思います。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。

第三話 第一回死亡フラグ

色々言いたいことがある。取り敢えずマフィアの息子なのは分かったし百歩譲って許そう。だが折角拾った命だ。今度こそは長く生きたい。これは切実な願いだ。都合良くもう一度こんな現象が起こるわけが無い。ならばここで生きていくしかない。今度こそ絶対に寿命まで生き延びてやる！……と決意したのは良いんだが、マフィアの息子？死亡フラグ満載……早く何とかしなければ。また早く死んでしまう。これが取り敢えず色々の内の一つだ。

もう一つは、何で昼なのにオーロラでてるの？誰も疑問に思っていないから聞けないで居たんだが……ここでオレの脳……厳密には違うが、ピンツ！と来た。空がオーロラにマフィア、この都市の位置を聞いた時に出てきた単語、微妙に進んだ医療。このキーワードから、ここはレジェンド・オブ・レギオスの世界だって。まあ違ったとしても非常に似ている世界といえるだろう。取り敢えずこれからやることが決まった。しばらくは、この世界が本当にレジェンド・オブ・レギオスの世界なのか調べよう。

夏も終わりごろに差ししかかって少し冷え込むようになった朝。自分がこの世界に来てから一ヶ月が経つ。自分がこの世界に来たころはうだるような暑さだったのが嘘みたいだ。やっとこの体にも慣れてきた。順調にマフィアのボスへの道をたどっています……あれ才力シイな？そんなフラグは建ててないはずだが？元々建ってたなんて決して認めない。

色々調べたがどうやらレジェンド・オブ・レギオスの世界で概ね間違いないようだ。サーキットなんかの存在も居るらしいし、亜空間増設機も在るらしい。ここまで揃えば決まりだろう。さてさらに大変なことが分かった。そう遠く無い場所にガメルダ市が在るらしい。つまりだ。いつのかは知らんが。そう遠くない内にここら一帯はイグナシスの実験のせいでゼロ領域になる。マフィアの息子なんかよりも確定的で巨大な死亡フラグがオレには建設されていた。願わくば手抜き工事であることを願う。対策を考えて良い案がないか探したが……あれ？回避方法無くな？隣の亜空間に行きたいエ……。さて回避が出来ないなら解体してしまえという事で、元凶のイグナシス君をどうにかすれば問題無いじゃないかと思つたが、更にムリゲー……。人間諦めが大事なのだ。オレが生きている間には来ませんようにと祈るだけしか出来ない。神様オレ何か悪いことしましたか。この鬼畜ムリゲーはクリア出来そうにありません神様。

第四話 マフィア（前書き）

第四話です。オッサン二回目の登場です。話しが飛躍し過ぎとか突っ込まないでくれると有難いです。

面白いと感じたら感想待ってます。

第四話 マフィア

この前は、自分が長生きすることの難しさに全オレが泣いた。だがまだ死ぬと決まったわけではない。取り敢えずはマフィアの方からかたづけようと思う。まずは状況整理だ。家のファミリーはこの都市で一番の勢力を誇るらしい。これは親父から聞いたことだから間違いないだろう。家もでかいし。未だに迷う。どうにかして欲しい。地図が欲しいな。

- 閑話休題 -

対抗勢力は二つだけらしいし家ほど力を持って無い。精々半分位らしい。二つ相手なら未だしもあの二つは仲が悪いらしい。勢力図に家がこの二つの間にあるから抗争が無いとか。……あれなんかフラグを建てたような気がするよ？気のせいだとオモイタイヨ。

とにかくオレはマフィアのボスの息子。安全に暮らすには、寧ろこのままボスになった方が安全なのだと思う。市民に紛れようにも、対抗勢力からちよつかいがくるかもしれん。絶対とは言えんがより安全な道を歩みたい。ならば対抗することも出来ない位、家が大きくなれば良いんだ。という結論になった。別に相手を陥れても良い

が。長生きするためなら何だってしてやるっ！取り敢えずファミリーを継ぐことを親父に言おう。

親父の書斎のドアの前に居る。親父の書斎の位置は一階の奥にある。何でも襲撃を受けたとき一番逃げやすい位置に在るらしい。オレは知らないが、噂では隠し通路があるらしい。無駄に豪華な飾り付けや重厚なドアが、かなりの威圧感を放っている。開けるだけでも気後れしそうだ。もしそれを狙っているなら決して無駄ではないような気がしてくる。してくるだけだ。僅かに冷や汗をかき、緊張した面持ちでドアをノックしようとする、「開いている。何か用なら入って来い」いきなりかけられた言葉にビクツとする。数秒間固まり「何だ？なにもないのか？」ともう一度かけられると慌ててドアノブを回し、ドアを開ける。そして、「失礼します」と一言かけ部屋に入る。

まず部屋に入って見たのは真剣な表情で何か書類を処理している親父だった。視線は書類に通したまま親父は声をかける。「少し待ってくれ。直ぐ一段落つく」紙に文字を書く音だけが書斎に響く。非常に沈黙が痛い。ペンの音が少しして止む。「さて、何の用かな？」にこやかに聞いてくる。だが目が笑って無い。ビビりつつもやっと声を喉から絞り出す。「オレ、このファミリーを継ぎたい」部屋の

温度が下がった。「別に、お前は俺の息子だ。黙っててもやるぞ？」とそこまで言ってからこう続ける。「それともそれは、今すぐに継ぎたいという事かな？私と敵対すると？」一瞬何を言われたのか理解出来ない。いや、しようとしなかったが何やら勘違いされてるようで、話が悪い方に行きそうで、慌てて反論しようとするがパクパク口が動くだけで肝心の声が出ない。焦っているのと親父が急に真剣な表情を崩し「クツクツクツ」と笑ってくる。「冗談だ。本気にするなよ」と言い。椅子から立ち、こちらへ来て頭に手を置き腰を落として目線を合わせ、「取り敢えず、これぐらいで動揺している間はまだボスの座は渡せんな」「ボスになりたいなら勉強してこい。話しはそれからだ」そういうと書類の処理に戻って行く。オレはすっかり抜けた腰を引き摺り自室に戻る。

部屋に戻り、ベットに直行する。そして呟く「やべえ……あれがファミリーを背負うボスの風格か……」「何かカッコいい……決めた！オレ絶対ファミリーを継いでやる！」

第五話 急展開って程じゃない（前書き）

タイトル通り急展開って言うても、あんまり変わってませんが、時間だけは流れました。レジェンドの方はハードカバーとラノベ版がありましたね。自分はハードカバーから買ったのでアイレインの顔がラノベで出たときは渋いと思いました。ラノベ版でよく見ると結構サヤとニルフィリアが違く見えるのは自分だけですかね？

面白いと感じたら感想を待ってます。最後にこんな趣味小説読んで下さった方に感謝を。

第五話 急展開って程じゃない

マフィアのボスになるって決めたけど……何か変わる訳でも無い。ただ黙っても継げたものがより確定的になっただけだ。日頃からちゃんと勉強はしてるし、組織運営についてや、色々な知識何かを学んだ。その中に銃のこともあった。初めて銃を触って、撃ちたくなくて親父に言ったら的を用意してくれた。嬉々としてのに向けて撃つたら……ええ、肩が脱臼しましたとも。あんなに反動があつたなんて映画に騙された……。ちなみに今では、ちゃんと撃てますよ？ まあいまだに目標から15メートル離れたらもう擦りもしないんですけどね。……自分で言ってる悲しい。まあそれは置いてだ。あの決断からもう四年経った。季節で多少寒くなったり暑くなったりするんだが……空のオーロラのせいで真夏以外は何か寒く感じる。た。そろそろ前の世界位の体格になって来た。前世に比べるとまだちつこいが、ちゃんと鍛えたおかげで前世の身体能力を遥かに上回ったが強化兵の皆さんと比べると月とすっぽん。他のファミリーと会話なんかも経験した。あの決断からかなりの成長を遂げたと言えると思う。まあここまで語って何が言いたいんだとオレ念願のファミリーを継ぐことになりました。親父が言うには、あと数年したら試練を出すからそれさえクリアすれば継げるらしい。何でもそこまで決意が固いなら何か形に残る成果を上げてボスになれ……とそういうことらしい。そんなに考えてくれたのは、嬉しいっちゃあ嬉しいんだが、最近失敗したらどうしようとか考えてしまうようになってしまった。一度こういう思考に陥ると脱け出しにくい。さて、オレもこの四年遊んでた訳ではない。フラグ回避のための案を練っていた。一番確実なのは主人公のアイレインを発見することだが、それは無理。主人公の都市は外周都市の田舎の方だったはずだから確認する術は無い。無理を越えて荒唐無稽。ならば、と浮かび上がった

て来た案がこれまた現実的な案だった。家の都市の近くにガルメダがある。つまり、原作キャラのリリスとニリスがいるならばレッドゾーンだということだ。オレのボスになっての初仕事はどうやら、ガルメダ市のティルティスというマフィアの家族構成の調査かららしい。他都市のマフィアにどうやって接触しよう。非常に先が思いやられる。死亡フラグ折るために死亡フラグ建てるなんて、すつごく矛盾というか本末転倒な話だな。まあそんなにじゃなきゃ生き残れ

無い位厳しい世界だ。只でさえこの世界は鋼殻のレギオスの世界誕生秘話。つまり前日譚である。ジャンルはラノベではなくハードカバーである。鋼殻のレギオスの原作者様はこの前日譚をバイオレンスでハードがボイルドな物語と称している。つまり現実は厳しいってことだ。今度こそは絶対長生きしてやるぞ。

第六話 試練1（前書き）

第六話です。漸く主人公がボスになるときがやって来ました。あと二話位試練の話が続きます。そしたら、晴れて主人公はボスになります。まあまだ必ずしもそうなるとは決まっていますがね。

あと自分的にドミニオってカッコいいと思うんですけど皆さんはどうでしょう？彼の死に際はイカシます。

面白いと感じたら感想を待ってます。あと評価も。最後にこの駄目小説を読んで下さって有り難うございます。暇潰しにでもなれば幸いです。

第六話 試練1

更に三年が経った。取り敢えずは前世より長生き出来て良かった。第一関門突破だ。だがまだまだフラグは一杯だ。体格もがっしりして身長もギリギリ180ある位で前世よりも高くなつて嬉しい。目付きは悪いらしいが気にしない。……サングラスかけようかな？

その時が来たのは朝の訓練を終えて、ベタつく汗を流してさっぱりして朝食に向かい親父の向かい側に座ったときだ。いつもこれでもかという位の威圧感を発している親父の雰囲気威圧感というよりは、ピリピリしているようだった。空気に重さなどないというのに空気が重く感じる。親父の雰囲気少し気圧されてしまったオレは、食事に手をつけること無く沈黙する。目線だけを親父の方に向けて、その雰囲気真意を悟ろうと頑張ってみるが読心術など出来

ないので諦めて親父が沈黙を破るのを待つ。 - 数分経っただろうか？もしかしたらまだ一分も経って無いかも知れない。やけに永く時間を感じる。やっと沈黙を破る気になったようなのか、渋い髭を生やした口を開く。

「お前のボスを継ぐための試練が決まった」

唐突に来た。いつか来るだろうと身構えて居たが、実際に来るとあつけないものである。そして親父が続ける。

「試練の内容は、最近この都市に集団で流れついたマフィアの一団が勢力拡大のための資金集めとして薬をさばいてるらしい。そういったの粛正だ」

……元一般市民になにさせるねん。ハードモードやないかいっ！盛大に心の中で叫ぶ。一応訓練の賜物が表情は崩さないようには出来た。つもりだがあとで聞いた話だと唇のはしがひきつってたらしい。

あの後、詳しい概要を聞いた後、素晴らしく重い空気の中全く味が感じられない食事して部屋に戻った。

親父の話だとマフィアと言ったが実際にはギャングとかチンピラの

集まりと大して変わらないらしい。前の都市で勢力争いに負け、その際にボスと主だった幹部をやられたマフィアの残党だという話。せいぜい二十人前後で強化兵は無し。まあ強化兵が居ない時点で更に珍しい異民や異界侵蝕者は居ないだろう。……あれもしかしてまたオレ、フラグ建てた？

閑話休題

奴らのアジトは都市の外れにある開発済みの廃棄区画の工場跡らしい。なんとまあテンプレと言えるような所に陣取ったものだと言いたい。まあ現実何だから、奇想天外なことよりセオリー通りが何かと都合が良いし、効率的なのだろう。武装は都市から出てきたときのままで、あまり良い装備じゃないそうだ。だが一部最近薬をさばいた金で、武器商人から武器を買ったらしい。要注意。とまあ情報はこのくらいらしい。あとは行動パターンなどがあつたが細かいので割愛する。親父は、部下はいくらでも使って良いと言ったが……マフィアだけでなく全てのことで、少ない対価で最大の成果をあげることが世の中を上手く渡っていく秘訣だそうだ。親父が口癖のように言っていることだ。無駄が嫌いな親父にならうとしよう。取り敢えずは作戦会議だ。何人連れて行くのかや武装はどうするなど、いつ襲撃するとか決めないと。大変だな。だがこれも長生きするための第一歩。ギャング達にはオレの長生きのための礎となってもらおうか。

第七話 試練2（前書き）

執筆中に間違えて一回消してしまいました。結構精神的に来ますね。

遅れながら、第七話です。主人公の試練が終わりました。そろそろレジェンドの方の原作に向かって行きます。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第七話 試練2

作戦が決まった。この前は何か偉そうなこと言ってたが、確実に勝ててかつ無駄なくやれる人数も作戦も分らない。こちら辺は経験しかない。とにかくこれがボスへの第一歩として、幸先良くスタートしたい。

作戦はこうだ。まず奴らは調べた情報によると明日の昼に薬の売買をするために数人が出かけるらしい。そこで手薄になった廃虚を奇襲して制圧し、帰ってきた数人を始末する。そういうシナリオだ。作戦決行は明日。確り睡眠をとるか。

正午。今、作戦目標から一キロメル離れた所で待機している。斥候

部隊からの報告があがり次第突入する。実は居ました何て笑い事では済まないからな。何て考えて居るとガタイの良い精悍な顔立ちの男が近づいてくる。

「若、斥候からの報告です。どうやら情報は正しいと見てよろしいかと思われます」

「そうか、報告ご苦労」

いざとなると緊張してくるな。前世は責任ある立場なんてあんまり経験してないしな。それがいきなり部下の命を預かる身だからな。胃に穴が空かないか心配だ。帰ったら胃薬でも買つか。いやでも再生手術すればいいかな？まあ予防という事で買っとくか。

「作戦決行」それが合図だった。たった一言それだけで何人もの人生が幕を閉じる。平和な日本で育った一般人の自分としては、例え直接的でなくとも人の命を奪うことへの嫌悪感が凄まじい。だが一度死んでオレは決めた。今度こそ長生きしてやると……。そのためなら何を犠牲にしてもやり遂げると。

硝煙と血が混じる臭いがする。別に初めてではない。此方に来てから何回か嗅いだことのある臭いだ。だがやっぱり慣れない。そこらへんに打ち捨てられた死体が見える。必死に生きようと激しく抵抗したと一目で分かる。両足の甲が撃ち抜かれている。地面でも這ったのか、血痕が地面を擦ったように着いている。その後に心臓と頭を撃ち抜かれている。はっきり言ってグロい。気分転換の為に一度外に出ようとする。護衛の二人に一人になりたいと言う。もちろん反対されたが押しきった。しばらく歩くとやけに工場にしては飾り付けられたドアがあった。何故ドアを開けたのか自分でも分からない。ただ分かっているのは何故か開けなければいけないと思ったことだけだ。ドアを開けた先にはくたびれたスーツを着た男が椅子に座って居る。オレはその男を知っていた。事前の資料で見た顔だ。資料に映っていた写真には野望に満ち溢れた目をしていたが、今は全く覇気が無い。男は入って来たオレを一瞥してこう言った。

「お客さんかね？」

それを聞いたオレはこう答える。

「ああ、鉛玉のライスを届けにな」

男が盛大に笑う。数瞬遅れてオレも笑う。部屋の中は二人だけの笑い声が響く。

「なかなか面白いジョークじゃないか？フツ良いだろう殺しな」

「どうせもう終りだ。新天地に賭けてみたがやはり無理だったようだ……」

男の独白を聞く。その言葉を言うともう何も言う事は無いのか目を瞑る。

「あんただって死にたく無かっただろう。誰だって死にたく無い。もちろんオレだって死にたく無い」

「許して貰う気は無い。ただオレが生きる為にあんたが邪魔だったという話だ」

「オレはあんたを殺した罪を背負って生きていける程器用じゃないが……あんたという死にたく無かった、必死に生きた人物が居たことは忘れない」

銃を構えて、引き金を引いた。距離は十メートル以内、流石にこの距離で外すわけが無い。狙い通り額に着弾する。男は椅子から崩れ落ちる様に倒れた。

第八話 後始末（前書き）

お待たせしました。第八話です。やっと主人公がボスになるためのフラグを回収しました。

自分が原作の鋼殻のレギオスで好きなキャラはリントンスです。あの、良い味出てますよね？設定からして好きです。皆さんは誰なんでしょう？

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第八話 後始末

あの後、護衛達が銃声を聞いて慌ててやって来るのが良く分かった。何故なら盛大に足音を鳴らして来たからである。訓練している筈なのに情けないと思う。余談だが家の訓練は軍隊式だ。テイルティスと一緒にいる。話を戻すとして、もし撃たれたのがオレで相手が生き残っていたのならどうするつもりなのだろうか？格好の的である。まあ自分達のボスが撃たれたかも知れないから慌てるのも分からない。いわけでは無いけどな。ていうかボスはオレなんだが。まあ勢い良く部屋にダイナミックに突入してきた訳だ部下達が。ドアを蹴破る様に開けて、その勢いのままグルッと前転しながら一回転し体勢を素早く立て直し、銃の照準を確り此方に向けている。そんなに素晴らしい動きができるなら、足音とかの初歩的なことを気にしてくれと声を大にして言いたい。その後、原状を説明して事なきを得たが、護衛共に怒られた。

何だかんだあったが、流石勢力が一番のマフィアと頷ける位には優秀だったようだ。帰ってきた残党も一人残らず処理した。予定外なことも少しあったが、概ね作戦通りに出来たようだ。今は後始末をしている所だ。原作で主人公のアイレインがしていたように薬品を使って骨まで残さず溶かす方法もあったが、流石に大人数なので普

通に解体工場に持って行って溶鉱炉に棄てれば問題無いだろう。別に作業記録が残っても握り潰せるしな。さて、やっと腐臭から解放される。こんな陰気臭い工場なんてさっさとおさらばしたいな。そう思いながらスイッチを押した。

帰ってきて直ぐに親父に報告する。すでに情報が回っていると思うが、何でも一つの視点ではなくあらゆる角度から見る方が良いだろう。鵜呑みにして間違っていましたじゃ駄目だからな。特にこの業界では情報が命だ。情報屋とのパイプは太く持つべきだと教わった。なんて考えて居ると書斎のドアの前に着いた。ドアをノックする。立て続けに四回叩く。因みに二回叩くのはトイレや空き部屋確認で、三回は友人や知人のときで、四回は初めて訪れる場所か礼儀の必要な相手に対する回数らしい。相も変わらず渋い声で返事がくる。ドアノブを掴み捻る。ドアを開けて中に入る。パリツとしたスーツをダンディーに着こなす我が親父。ドアを閉めて机の前に近づく。

「親父、試練は達成してきたぞ」

開口一番に言う。親父は眉一つ微動だにせず言い放つ。

「……詳しい報告をあげろ」

「少し位、頑張つて来た息子に労いの言葉とか無いのかよ？」

少しムツとしながら言い返す。

「ふむ……そうだな。まだまだ甘い所が有るようだがまあ及第点つて所か。これからはお前がボスなのだ。部下の命を一身に受ける。その重圧に負けないように精進しろ……位だな」

「さあ、報告してもらおうか」

褒めたのかどうか知らないような言い方だったが、話の流れからして褒めたんだろうな。さつさと報告終わらせるか。

報告が終わる。親父が話が終わって少し間を取ってから話す。

「ボス交代には面倒くさい手順がある。まだ時間がかかるから、取り敢えず今日は部屋で休むと良いだろう」

オレは素直に従う。表面上は大丈夫そうでも精神的には結構キていたからな。ゆっくり休むか。そう思いながら書斎を出て自分の部屋に戻って行った。

第九話 マフィアのボス（前書き）

第九話です。やっとボスになりました。これからレジェンドの世界を生き残るためにより一層頑張ってくれることでしょう。因みにこの小説主人公の名前全然でないから忘れた方も多いのでは無いのでしょうか？主人公の名前は……あれ何だっ（ry 名前は、ルクライン・リライトですよ！

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄作を読んで下さった方に感謝を。

第九話 マフィアのボス

色々と、ボスの継承に必要なことがあった。継承式の打ち合わせや衣装のスーツの新調など色々あった。まあ今は、段取りを終え小休止だ。継承式は明後日。この継承式に敵対マフィアである両ボスを招くという無謀なことをしても大丈夫なあたりに、あらためてアトラスファミリーの権力の強さが伺える。もし、継承式で襲われても守りきれぬ自信があると言うことだ。まあ別に言って無いだけでかなりの安全確保はしてある。避難経路を確り確保したり、当日の両ファミリーの監視、牽制もしている。そんなことする位なら招かなければ良いと思ったが、親父に理由を聞いて納得した。理由を聞いてみると、どうやら「家は、敵対関係の貴方方を招いても何ら問題無いですよ」と言いたいらしいのだ。言うならば一種のデモンストレーションだ。家のファミリーが如何に力を持つて居るのかを両ボスに知らしめているわけだ。式場も盛大に飾り付けたり、格式ばったもので統一して家の財力を見せ付けている。いつか親父の書斎のドアでオレが感じたようなものだ。まあ勢力図を維持するのも大変なわけだ。

とうとう、当日になった。オレは、ぴったりのスーツを着こなし髪も整髪料でぴちっとオールバックに決めて見た、何か妙に似合うの

だが目付きの悪さから使用人と部下に声を掛けようとする大半が後退りやがった。誰かオレに安らぎをくれ。オレにはやはり胃薬が必要だな。継承式が終わったらマツハで買いに行こう。

継承式が始まる。周りを見渡すとこの都市で主だった者は皆来ているようだ。そんな大人数を入れてもなお広いこの部屋を誉めるべきか、それとも呆れるべきなのか非常に迷うが……まあどうでもいいことだ。司会役の男がマイクを持って出てくる。どうやら始まるようだ。静謐とした空気の中、司会役の男の声が響く。

「これより、アトラスファミリーのボス継承の儀を始める」

「まずはボスの挨拶から」

司会役の男は、そう言うつと舞台袖に移動する。代わりに親父が真ん中にやって来る。

「えー本日はお忙しい中お集まり下さった来賓の方々に感謝を」

よくも親父はあんなに白々しく言えるもんだ。実際、拒否権は無いに等しいというのに。なんて思っている内に親父の挨拶が終わりに差ししかってくる。

「本日はゆつくり式とその後の立食会で楽しんでいって下さい」

親父がお辞儀する。そして席に帰ってくる。

「次ぎはお前が話す番だ。良いか？最初が肝心だ。嘗められないように」

はつきり言つて皆の前でなに言つたのか覚えてない。なんかそれらしいことを言つていたのは覚えているが、緊張か何かで考えていた話す内容が全部吹っ飛んだ。必死に思ひだそうとするが、断片的な単語位しかなくて、ほぼアドリブで頑張つた。誰かオレを褒めてくれ。とにかく何事も無く継承式は終わった。オレは念願のボスになれたのだ。なつてしまふと案外呆気ないが、まだ感慨は湧かないだけで後から実感するだろう。因みに今は、立食会だ。立食で食べるときは主に交流を図るためにするが、やれ飲み物を注ぐうだの、食事を取ろうだのこうまで付きまとわれるのは、流石に鬱陶しい。もちろん顔には出さないが。やつてる本人は気に入られるかどうかで将来がどうなるかの瀬戸際だから、至つて真面目にやつてるのは分かるのだが察して欲しい。お前らが鬱陶しいことを。

あの後、オレは少し酔ったふりしてベランダに逃げ込んだ。別に嘘は言っていない。酔ったふりとはいえ、結構飲んだから夜風に当たってたかった。ベランダは風がとても涼かった。溢れる蛍光灯の明かりやビルの手すり。高速道路を流れる車のライト。更に、空にはすっかり馴染んでしまったオーロラの空。素晴らしい夜景だった。これが人間の作ってものだと思うと何だか感慨深い。そうだなそろそろオーロラにも飽きてきた。いつか首都に行って星空を見に行こう。天体観測と洒落こもうかな？

第十話 新展開（前書き）

第十話です。PVの方ですが一万超えました。ユニークの方は2500位です。とても嬉しいです。こんな小説を読んで下さって有り難うございます。

因みに作中ででっかい死亡フラグが亡くなりますが、ちゃんと原作に繋がって行くので心配しないで下さい。

テンプレと化して来たこのセリフ。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。こんな駄目小説ですが読んで下さった方に感謝を。

第十話 新展開

いつか首都に星空を見に行こうと決意したあの日から五年が経った。人が変わるには十分な年月で、逆に何も変わらないにしては少し長い年月だ。もうすでにボスとしての仕事は日常の中の一部に過ぎない。朝起きて朝食を取り、書斎で書類を処理し、体が鈍らない為に昼から訓練して、また夜に書類を処理する。そして、寝るまでの時間に読書したりするとか、たまにパーティーや出入りがある程度だ。ルーチンワーク。現実は一層厳しい。マフィアの世界は良くも悪くも弱肉強食。自分が強いの立場ならこれ以上に無い程やり易い。逆なのはごめんだと考えるのは人間のエゴ。実際問題誰かが強ならば誰かが弱に当てはまる。例えるなら勝者がいるなら敗者がいるそういう事だ。ボスになってから五年色々経験した。今では勢力図が少し変わった。相変わらず家のファミリーが一番だが二つ内の一つが最近凄まじい勢いで勢力を拡大している。幸い家のシマではなく、もう一つの所と大きいとは言えないが中堅に当たる家にもその二つに属して無かったマフィア吸収しているらしい。それにより急激な勢力拡大を遂げたらしい。オレはこれの原因を最近になって少しずつ増えてきた異界侵食者のせいでは無いかと睨んでいる。原作でも異民化問題はあったしなそれに異民となつて調子に乗ったファミリーがあったし、それに近いケースなのだろう。異民化問題か……残念ながら今のオレにはどうすることも出来んな。アルケミストでも居ない限り。だがアルケミストは公式には全員死亡したと発表されたからな。厳密には死んで無いのも居るが何処にいるのか皆目検討がつかん。都市で一番権力があつてもどうすることも出来んとは情けない。

因みに話がガラツと替わるがガメルダ市の調査が済んだ。ティルテイスというマフィアにリリスという娘が居ないか調べたんだが……嬉しい誤算があった。何故なら調べた結果、リリスどころかティルテイスというマフィアも居ないというのだから。この事を知ったときは内心駆け出したい位だった。とにかく自分が生きている間は何とかなりそうだ。ならば問題は異民化の方だけだ。さて、本当に最近の勢力拡大は異民化のせいなのか詳しく調べますか。うーん、やることがいっぱいだ。これは、心の友の胃薬君と信頼を深めとくとするかな？

第十一話 転機（前書き）

第十一話です。遅くてすいません。

そろそろマフィア篇クライマックスです。レジェンドの原作に繋がって行きます。クライマックスって言っても自分の文才で上手く盛り上げれるか心配です。どうか生暖かい目で見てください。

面白いと感じたら感想をお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十一話 転機

最近、勢力を増やしてきた片方のファミリーが遂にもう一方のファミリーをのみ込んだ。非常にまずい事態になった。もともと家と同じ位のマフィアが後継者争いで二つに別れたから家が一番になったのであって、そういう背景があったからそもそも二つのファミリーが連盟を組む筈が無いとたかを括っていて、これからも手を取り合わないだろうと考えていたのだが、吸収されたのなら話は別だ。一方が片方を隷属させているならば関係ない。更に、件の後継者争いがあったのもう150年位前、幹部なら兎も角、下の方はもう既にそんなことあったんだレベルだ。純粹に戦力を増やすなら下っぱを集めた方が手っ取り早いし、言う通りにならない幹部は寧ろ邪魔だ。実際に大部分の幹部は処分されたようだ。

さて、何でこんなになるまで対策をしていないかと言うと奴らの動きがオレ達の予想を遙かに越えて早かったからだ。前に異民化問題を取り上げてからまだ一週間だ。この一週間は都市の勢力が著しく変わった一週間だった。都市史上に無いくらい激動の一週間だった。異民化問題ってのを甘く見ていたのだろう。目に見えての侵攻は無いがオレ達のファミリーのテリトリーに平気で入ってくることから既にオレ達のファミリーを恐れて無いのだろう。最低でも抵抗は出ると考えているに違いない。情報屋からの情報で奴らが異民化していることは掴んだが……それだけだ。裏はとって無いし断片的で判断がつかないが確実に異民化しているのだろう。でなきゃこの強気な姿勢は無理だ。問題は異民化はどのようにしているのかだ。誰が手引きしているならそいつを始末すれば良いんだが……もし亜空間に綻びが出来たなら不味い。何とかしようがない。アルケミストは居ないし、亜空間増設機をいじれるような科学者は居ないし。どうか前者であることを願いたい。

あれから2週間、侵攻が始まった。オレ達は自衛しているだけで手出しはしていない。情報待ちである。黒幕がいるのか、亜空間に穴が空いたのか調べている。攻撃が激しい。部下達から明らかに人間としてはあり得ない形をしていた奴がいると報告が来ている。異民化は確実のようだ。銃が効かないような奴もいたらしい。まだ数では勝っているが、異民化のせいで余り差はない。次第にこちらの数も減って行くだろう。そうなたら家の負けだ。あと3日待って何の情報も入らなければ総力戦を仕掛ける積もりだ。持久戦になっても困るのはどちらかと言えば家の方だからな。

3日経ったが……入って来た情報は奴らが異民化の力にあかせた局所的なゲリラ戦を始めて家に甚大な被害が出始めたというバッドニュースしか入らなかった。……仕方ない。

今、オレは屋敷に居る全ての部下の前に立っている。流石、厳しい訓練を積んでいると思う整列だった。これからコイツらを死地に送らなければならないと思うと責任で胃が潰れそうだった。だが迷っている暇はない。ボスが不安そうにしていると部下が心配する。内心の不安はおくびにも出さない。

「諸君らも知つての通り今、オレ達のファミリーは未曾有の危機に瀕している」

誰も音を立てない。言葉はまるで静かな水面を揺らす振動の様に浸透していく。

「それは、ひとえに過ぎる力を手にし、調子に乗ったマフィアどものせいだっ！」

「今もこうしている間にオレ達の仲間は死んでいつているだろう」

「死なない保証なんてないし、勝てる保証も無い。だがオレ達は負

ける訳にはいかないっ！もう既に死んでいった仲間達に報いる方法はただ一つ、奴らとの抗争に勝つことだっ！」

「徹底抗戦だ！最後の一兵まで残らず殲滅だっ！オレに着いて来い！」

話終わり、響いていた声が静まり返る。まるでシーンと擬音が出そうな位静まり返る。一瞬、置いて爆発した。いや爆発などしてないが、まるでそう聞こえる位の爆音だった。その様子を一瞥すると、背を翻し去っていく。書斎でもっと対策を検討しよう。

第十二話 最後……（前書き）

第十二話です。タイトルがあれですが別に終わる訳じゃないです。第一章完結って所です。やっとマフィア篇が完結しました。これから原作までの空白期間になります。多分一気にキンクリします。主人公が大変なことになりますがちゃんと話は続きますので安心して下さい。

面白いと感じたら感想宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄作を読んで下さった方に感謝を。

第十二話 最後……

あの演説から4日経つ。部下達は必死に戦線を維持してくれた。だが時間が経ち都合が良いのはオレ達ではなく奴らだ。初めは互角で数も余り差がなかった。しかし、奴らのどこにそんな人員がいるのか不思議に思う位、後から後から沸いてくる。数の力は偉大だ。それだけで武器になる。戦力差のせいで次第に此方側の陣営が少しずつ崩れだした。今まで保つて来た戦線だが一角が崩れ出すと、もたない判断したオレは直ぐに今の戦線を縮小。守る範囲を狭くする事で何とか戦線を維持する事が出来た。……が、それもあと少し持つかどうかである。そこで決心した。このまま戦つても負ける。だがまだ相手のボスを叩けば希望が見える。下っぱは、別に目的があつて戦つてゐる訳ではない。大半が命令されたからであつて出来れば戦いたく無いが、勝ち戦を捨てるのも馬鹿らしい話だから戦つてゐるんだらう。命令するものがいなくなれば今よりは有利に戦況を進めれるだらう。そして頃合いを見て、会談し落とし処を見つけて和解が妥当だと思う。異民化問題は頑張るしか無いが、今は生き残ることが優先だ。……長生きするためなら逃げれば良かったのにな……自分でも知らない間に愛着でもわいたかな？

相手のアジトに特攻をかけることになった。嫌、そんなことしたく

無いんだけどね。生き残るためにはこれしか無いんだよ。部下に任しても良かったが、自ら行かなきゃ駄目な事に気付いた。部下達が信用出来ない訳じゃない。どうせここに居たって死ぬのは変わらないならば、自分で道を切り開かなければならない。良いぜ、死にたく無い奴の底力魅せてやるぜ！

血と硝煙の渦巻く世界にオレは居た。どれがどっちの死体か何て分からない。それどころか人間だったのかさえも分からない。こんな状況でも眉一つ微動だにしなくなった自分が怖くなる。敵と遭遇する度に少しの仲間を切り捨て足止めし、先に行く。仲間を切り捨てるのは辛いし嫌だが割り切るしかない。この特攻に付き合ってくれた馬鹿共は50人。こんなに居てくれたと思うとボスとしては誇らしい。命懸けの作戦で、まず死ぬであろう作戦に従ってくれたこの事実が嬉しかった。確実に数を減らすなか確実に進んで行った。幸い総力戦の様に見せかけて必死に戦っている前線の陽動が効いているのか、敵は意外と少ないが確実に数は減って来ている。既に12、3名だ。仲間が一桁に入った矢先にアジトに着いた。裏口から潜入する。驚くほど敵が居ないさっきまでより圧倒的に少ない。前線に出払っていると考えるが何か違和感を感じる。アジトに入ってからこれといった戦闘も無く調べたボスの部屋に一直線に向かう。ボスの部屋の扉の前に立つ。扉を蹴り飛ばしそのまま扉を盾にするように部屋に飛び込む、部下達も次々に部屋に入る。そして絶望した。

ボスはいた。継承式に見た顔だから間違いないだろう。だが問題はここからだろう。その部屋はかなり広かった会議でも開ける位にそしてそのボスを守るように立つ数十人の男達。だがこの男達は明らかに人から逸脱した異形だった。すなわち全員異民だった。体が硬直するまるで凍った空気が体まで凍らしたようだった。それを溶かしたのは相手のボスだった。

「まあ、まずは良くここまで辿り着いたと褒めておこう」

「残念だったな私のファミリーには嗅覚が異常に進化したタイプの異民化をした奴がいてね。君達がこのまま終わる筈が無いと考えた私は監視していた。そしたら案の定特攻してきた。もう一度言う。残念だったなお前達の動きはお見通しだ」

ニヤニヤと嘲笑を向けて来る。非常に生理的嫌悪がしたがどうしようも無い。万事休す。

「この世とお別れは済んだか？……………殺れ」

無慈悲に宣告された。奴らがオレ達に向けて銃を撃つ。部下は全員オレの壁となつて死んだようだ。かく言う自分も右肩と腹に一発ずつ食らって虫の息だ。相手のマフィアのボスが近寄ってくる。そしてオレの髪を掴み上げ自分に顔を向けさせる。

「どうだ？自分の無様な姿は？お前は私達の歴史に刻んでやるよ。昔、私に逆らった馬鹿としてな。クックククハッハッハ」

その言葉に諦めそうだった自分の心に火が点いた。近寄って来た馬鹿をあらんかぎりの力で胸ぐらを握りしめる。

「だったらオレからアドバイスだ。熊は断末魔が止むまで近寄ってはいけないって聞かなかったか馬鹿め」

そう言ってさっきまで忘れていた物を取り出しピンを抜く。そう手榴弾だ。

「一緒に地獄へ行こうぜ？」

「や、止める。こんなところで あっ」

光が部屋を支配した。

第十三話　ゼロ領域（前書き）

第十三話です。ちょっと短くてすいません。自分が一番書きたかった所が書けました。あと一話入って原作に突入します。レジェンドの方の展開は原作に沿うので主人公の出番が減るかも知れませんが、でも主人公の視点で原作を語るので居ない訳では無いです。

早くドミニオさん書きたいです。自分の表現力でドミニオさんの死に様を上手く表現出来るか心配ですねえ。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。あと評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十三話　ゼロ領域

意識が覚醒する。何年も経ったような気がするし、まだ一分も経って無いかもしれない。朦朧とする意識の中思い出す。あれ……オレ死んだ筈じゃ……。ハツとして体を起こす。嫌、この表現は正しく無い。何故なら自分は横になっていなかったからである。普通、体を起こすというのは地面に寝転がった状態から起き上がることを言うが、自分は寝転がっていなかった。何せ寝転がるための地面が無いからである。そりゃもう驚きだ。落ちないように手足をジタバタさせたが少しして全く落ちる気配が無いと分かったら止めた。周りを見る。真っ暗だ。黒という色だけが支配している空間。それ以外は認めないと言う程頑なに他の色を混入させない。何でこんな所に……。自分は死んだ筈では無いか。もしやこれが死後の世界って奴か？なら地獄何だろうな。なんせ黒しか存在しない空間に放り込まれるのはかなり辛い。人間一番耐え難いのは退屈なのだから。と、そこまで考えて自分が死ぬ直前のことを思い出す。そうだ……確かあのとき……。手榴弾を投げて死を覚悟したとき、急にオレが倒れた場所に穴が空いた。真っ黒で混沌の混沌たる姿がむき出しになって顕れる。もちろん逃げることなど出来ない。逃げる積もりも無いが……オレは逆らこと無く飲み込まれていく。朦朧とする意識の中で最後に視界に眩しい光の奔流が走った。そうだ、そうだったんだ。つまりここは……絶縁空間。この場所を正しく認識したからなのか、それとも時間が経ったからなのか分からないが、急にそれはやってきた。息が詰まる。大気が無くなったのだ。空気以外の何かとしか形容できないものが喉を伝う。どろりとしていながらにして水のように流れ、体内の指先にまで粘り気のある不快なものが付着する。刹那の内に細胞の隅々まで浸透し、身体中の中身を総入れ替えするような感覚。何とも言えない恐怖と苦痛が来る。

視界が捻じ曲がる。

聴覚が断絶する。

嗅覚が逆転する。

触覚が奔流する。

味覚が散逸する。

全ての感覚が狂う。自分以外の何かに生まれ変わろうとするかのような底辺にして絶頂、奇怪にして滑稽な変革が自分の身体の中で起こっているような感覚。

まるで

世界が

溶けて

崩れた

ような。

第十四話　ゼロ領域2（前書き）

第十四話です。主人公、正真の異民となりました。でも最強にする気はこれっぽっちもございません。能力何かは次回。あと少し改行してみました。すいません余り変わりませんでしたね。

どうしても理屈が思い付かず、少しだけご都合になりました。すいません勘弁して下さい。こじつけ臭い理由ならあるには在りますが。

貴方はもし自分が絶縁空間に入ったら生き残れると思いますか？作者は一分もしない内に死にそうです。

面白いと感じたら感想宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十四話　ゼロ領域2

身体中がめちやくちやだ。酸素を無意識に欲しがる。

亜空間増設機が想いを受け取ったのか、大気に酸素が満たされていく。肺中に酸素が行き渡るも、急に取り入れたからなのかむせてしまう。

「ゴホッゴホッ」

咳も落ち着いてくる。だが咳が収まるって少しすると何だか凄く眠くなる。まるでもう二度と起きないかのような安らかで心地よい感じだ。何だかもう全てがどうでも良くなっている。

こう空气中に分解されて何かに生まれ変わるような、それでいて不快な感覚。オレはこの感覚を知っている。

そう死だ。あの全ての抵抗を嘲笑うかのような無力感、まるで、生のタイムリミットを示したかのようなカウントダウンに感じられたあの次第に聞こえなくなっていく心臓の鼓動。そして何よりも全てが凍り付いたかのように冷たくなっていく体。ぞつとする程嫌だった。

もともと長生きしてやると決めたのもあの恐怖心を二度と味わいたく無かったからだ。人間誰だって死にたく無い。

彼がひとえにこの絶縁空間で自我を保っていられるのも、一度死への恐怖心を味わい二度と味わいたく無いと心から願っているからだ。いや、願うというレベルではない。既にそれは一度死んだことで手に入れた生への渴望だ。

普通の人では生き残るどころか自我すら保ってられないこの絶縁空間。

皮肉なことに死んだことが死なない理由だった。

何年経っただろうか……。原作の主人公が言ったことが良く分かった。

「自分の人生最高の瞬間が、まさしく言葉通りだった」

とあるが、確かに最高だった。だが最高の瞬間が永遠に続くならそれが普通になる。流石に変わらない景色をずっと眺めるのは辛いし、何年も前から飽きて居た。

それにあんまり気にしている暇も無かった。自我を保つ為に必死に死にたく無いと頭の中でリフレインさせていたからだ。何か情けない気がするが、プライドは二の次だ。

更に時間が流れた。死にたく無い一心で頑張つて来たが流石に一般人にはもう無理だ。死にたく無いという想いも、もうすでに摩耗し

て来ている。

色々死亡フラグがあつたのにな……。予想外なところの死亡フラグを回収してまったぜ。あーあ、イグナシスとかガメルダ市とかあつたのに。

そう言えば自分のファミリはどうなったのだろうか？生き残ってくれているだろうか？かなりの時間が経つたが、そろそろガメルダ市にティルティスファミリは出来たのだろうか？何かすつごく気になって来た。元同業者として気になってくる。原作は、始まったのだろうか？色々気になって来たがもうオレは駄目だ。摩耗しきっている。

しかし、二度目の人生はこんな所で終わりか……。一般人にしては頑張ったかな？残念なのは原作とやらに関わってみたかったか……。な？急に周りが明るくなつた気がした。自分に迎えても来たのだろうか？自分の行き先は天国でも地獄でも無く自我の無い魂として永遠にさ迷うと言つのに……………。

第十五話 ガメルダ市（前書き）

第十五話です。長く待たせてしまいすいません。土日は忙しかったです。……言い訳は此処までにして、と。

今回から原作に行こうとしたら、まだ原作前になってしまいました。すいません。でも原作キャラが出ました。ちみっこいですが。

作者の力不足で原作キャラに可笑しな所があるかも知れません。キヤラ崩壊が嫌だって言う方はブラウザバックをお願いします。あと変なところが有れば教えて下さると有難いです。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さって方に感謝を。

第十五話 ガメルダ市

目を開けてまず感じたのは強烈な光だった。目が焼けるかと錯覚する位の光源だった。そしてのたうち回る。

……さて光？

可笑しい自分は魂だけの存在になった筈だ。ましてや絶縁空間で光何てある筈が……。

ゆっくり目を薄めて開き回りを見る。暫くは何も見えず白いだけだったがうつすらと見える様になって来た。

……どうやら部屋のようなだった。オレは生きている。これで二回死に損なった。悪運が強いのか、死神に嫌われているのか至急、脳内会議したい。

まあ冗談は置いといて。どこ何だろう此処？立派な部屋で調度品も一級品、元マフィアのボスのオレが見ても、申し分ない位素晴らしかった。多分この家の人が拾ってくれたのだろうと予測する。それならばお礼を言わなければならない。そう思っ

「痛ったー！！」

ベッドから転げ落ちた。盛大な音を発てる。

「何だ？体が動かねえ」

取り敢えずベッドに戻ろうとするが体がまるで石になった様に重い。そつえば、絶縁空間に引きこもってたから、結構動いてないな。やっと戻れたのにリハビリからかよ……。

あのあと盛大に音を出したからか、厳つい黒服を連れたちっちゃいお嬢さんが現れた。まじびびった。リアルでびびった。胸元に奇妙な膨らみを全員から発見……ここマフィアの家かああああああアアああア！

発狂仕掛けたがもう大丈夫だ。ノープロブレム。落ち着いたところを見計らって黒服の特に筋肉の素晴らしい方に首根っこ掴まれてベッドに寝かされた。そしたらお嬢さんに声を掛けられた。

「あんた、家の庭に倒れてた所を見るに何か訳有りなんでしょ？」

庭に倒れてた？まさか絶縁空間からこの庭に落ちたのか？そんな風に困惑しているオレを他所に勝手に話を進めるちっちゃいの。

「あんた、これから行く当てがあるの？」

取り敢えずは無いと言って置くのが正しいか？

「無い」

「そう、なら丁度良かった！あんた私の家来になりなさい！はい、決定！嫌だつて言つても、もう駄目だよ！」

…………… what？ナニをイイダスンダこのお嬢さん。

やけにハイテンションだ。だが行く当てが無いのも事実。取り敢えずの食い扶持を探さなければならぬ。渡りに船、そう思った。そういえば此処なんてファミリーだろう？

「そういえば、此処って何処なんでしょう。あと貴方は？」

「此処？知らないで来たの？変な奴」

「一度しか言わないからね。此処はガメルダ市のテイルティスファミリーで私は娘のリリスよ！」

…………… でっかい死亡フラグが戻って来ました。

拝啓、神様呪つてもこれは許されませんでしょうか？…………… 何？許されないって、そんなバカな。

第十六話 いい加減マフィアじゃなくても良いんじゃない？（前書き）

第十六話です。主人公がどちら側に付くか決まりました。イグナシス側です……が、リリースが付いているから付こうかなという感じです。基本スタンスはリリース優先です。因みに恋愛は無い予定です。あくまで予定です。昔の自分と似たような立場に同情して、孫を見守っている感じです。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十六話 いい加減マフィアじゃなくても良いんじゃない？

その後、雇用条件などの確認をしたり、自己紹介をした。どう見ても怪しさ満点のオレを何故雇ったのか聞いたら……

「あんた身寄りなさそうじゃない。なら、使え無くても捨てれば良いし、使えるなら儲けものだもの」

何て言いやがりました。原作でも思ったが、もうこんな小さい頃からこんな性格なのね。確りしてんな。でも、甘いね。体が動かしづらかったが、何故か今はもう最高のコンディションだ。

三人か……………。

近くにいた黒服の一人の懷に素早く潜り込む。今までとは段違いのスピードだった。周りは何も気付いてない。やっと潜り込まれた黒服がオレに気付く。だが遅いオレはもう膝を腹部にめり込ます寸前だ。回避行動を取ろうとするが敵わずめり込む。やっと周りが気付くが、既にオレは膝をめり込ました奴から拳銃を奪いとる。

そこまでして、黒服の一人が銃を放つが肩を掠めるだけで終わる。そして、リリスの方に向かい頭に銃口を突き付ける。

「動くな！こいつの頭を吹き飛ばしたく無いならな」

リリスは展開に着いてこれて無いのかキョロキョロ目線をさ迷わせる。そして、理解したのか下を向いて頂垂れるも、直ぐにキツとした目で此方を見てくる。

「そう言う利己的な考えは、嫌いじゃないが……もう少し考えた方が良い。もしオレが敵対マフィアに雇われていた者だったらどうする気だ？」

「そう言うことを言う人は、敵じゃないわ」

「……そう言うことを言っているんじゃないんだが……まあもし相手が自分の力が敵わない奴だという可能性も考えるべきだってことだ。あんたの判断ミスで割りを食らうのは部下だからな」

そこまで言って銃口を頭から離す。そうして拳銃を黒服に返す。

「おい、アンタほらよ。拳銃は確り握ってろ」

床を滑らせて返す。次の瞬間、残りの二人から発砲される。腕の筋肉が強張っていたことから予想していたオレは難なく銃口の先から逃れる。そして、膠着状態に陥り掛けたとき、

「ストップ！止めなさい。……ねえあんた試したわね？この私を？」

「そうだが」

「雇われる気はあるの？」

わずかに考えるが、返事をする。

「もちろん」

「なら、良いわ。あんたかなり使えそうだしね。私が判断ミスしなきゃ良いんでしょう？」

端から見ても自信に満ちている。流石に目を見開く。命を狙われといて直ぐこの対応。……これが一つの世界で中心になり得るカリス

マか…… オレじゃ敵わないな。オレもこれくらいカリスマがあつたらなあ。ファミリーを勝たせてやったかも知れないのに……。
そうだ、なら今度はそんなことが無い様にしよう。この自信に満ちた瞳をずっと守ろう。それがあいつらの最後の手向けだ。

そう言えば、リリスに銃口を向けたときに、叫んだあのセリフ……。完全にやられ役のセリフだ。フラグが建たなくて良かった。

第十七話 正真の異民（前書き）

第十七話です。

此処で皆さんに重大なお知らせです。

先に謝っておきます。すいませんでした。前に投稿した内容ですが、原作上重大な矛盾がありました。判る方には判りますが、それはリリースはこの国の生まれではなく、元々違う国の人でゼロ領域に落ちて絶縁空間を越えてガメルダ市に來たのです。マフィアの娘という立場もガメルダ市侵食の際に奪い取ったものです。

ですので、この小説ではリリースは普通にこのガメルダ市の生まれで小さい頃にゼロ領域に落ちて戻って來たという設定にします。

良く原作を確認しなかった作者のミスです。すいませんでした。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待ってます。
最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第十七話 正真の異民

あの後、和解したオレ達は仕事の話をしたが、どうやら緊急時や他勢力に仕掛けるとき以外は、基本的にリリスの護衛をしていれば良いらしい。

あと、妹のニリスにも会った……………ん？待て待て、何故ニリスが居る。ニリスはリリスがゼロ領域を生き延びた時に作った鏡像だろ？何で居るんだ？

……………まさかもう既に正真の異民ですか、ゼロ領域越えちゃいましたか？ということはイグナシスとも会ってる訳で……………まあしょうがない。オレは、あの時に感じた自信に満ちた目を守れば良さ。とにかく自信満々なのは良いが、それで足元すくわれてちゃ意味がない。

オレ達にはでっかい死亡フラグが建っているんだ。何とかしないとなあ。取り敢えずイグナシスをどうしようか……………。

一番良い選択はオレもリリス達も生き残る事だが……………実際問題無理だ。この国はイグナシスの実験で破棄されてゼロ領域に叩き込まれる。例えばイグナシスと関わって居なかったとしてもそこで終りだ。いや、リリスなら生き残るかも知れないが……………オレは無理かも知れない。あんな所に二度と入りたくない。

ある意味、イグナシスに協力しているのは良い選択かもしれないが、最大の難点は自分達が、所謂世間一般では悪役的位置にいる事だろう。一級フラグ建築士の自分ならそれだけで死亡フラグを建てれそうだ……………あれ目から汗が。

主人公側にならと考えたが、こっちはこっちで、此处はオレが食い止める的な事が発生しそうで怖い。何だろう……………急にトイレに駆け込みたくなった。

自分の力位、分かってる。自分一人がイグナシス側に回ったって何

も変わらない方が可能性が高い。

一番はイグナシス側の勝利だが、ニルフィリアが居るせいでそれも怪しい。ニルフィリアより言いたくないが劣るリリスは捨てられてしまいかも知れない。

ならば、ベストよりベターだ。原作の様に話を持って行く。それならば、取り敢えず死にはしない。アイレインの中で生き残る。アイレインに月から出た後に出してもらって、そして最終決戦で二人とも生き残れば良い。

これなら生き残れる可能性が高い。問題は何年掛かるねん！という話だが……一応自分は正真の異民、寿命など在于て無いに等しい。流れる時間に耐えかねて、発狂しなきゃ大丈夫さ。ゼロ領域とは違い退屈はしないだろうからな。

良し！方針は決まった。第一計画はこれにしよう。

問題はリリスに言うかどうかだが……無理だな性格上負けると言われて、ハイそうですかと言える性格ならば、そもそも絶縁空間を生き残れ無い……ならば自分一人でやるか。

オレは自分に無かったものを持っているあの少女さえ守ればそれでいい。ずいぶんと独りよがりな作戦で余計なお世話かもしれないというか余計なお世話だろう。分かってくれとは言わないが、オレが憧れたその瞳の輝きだけは失って欲しくない。

一級フラグ解体士のオレが片っ端からフラグをクラッシュしてやるぜ！

第18話 レギオス世界の成り立ちの理由（前書き）

お久しぶりです。忘却の彼方です。長い間ほったらかしにしてしまいました。テストが終わった後に模試があつて忙しかつたのです。まあ言い訳は、このぐらいにして置きましょう。もう一度、本当にすいません。

今回の話から専門的な言葉を使います。どうしても使わなければいけなくて…大体wikiを見ていただければ理解頂けると思いますが、たかだか小説を読むのにそこまでして頂くのもあれなんで、この場を借りて少し説明したいと思います。ネタばれも結構あるので気をつけてください。あと、あくまで独自解釈です。設定集もみてますが…。

絶縁空間 ゼロ領域が亜空間同士の間が発生し、互いの行き来を妨げる壁となったもの。

正真の異民 これは絶縁空間で確固たる自我を保ち亜空間へと帰還することができた者のことで、絶縁空間で生き延びるための願いや思いを元にした自分だけの法則を得る。人間というよりかは、一つの法則をもった一つの人間の形をした異世界だと思つたほうが良い。

取りあえずこのぐらいで、他にも分からないことがあれば遠慮なく感想に書いてください。

面白いと感じたら感想を宜しくお願いします。評価も待っています。最後にこんな駄目小説を読んで下さった方に感謝を。

第18話 レギオス世界の成り立ちの理由

前回は重大な決意をしたが、まだまだリリスは小さい。つまり原作開始までの時間まで対策を練れるということだ。非常に大きなアドバンテージだ。

大事なのは、どうしたら二人生き残れるかだ。前回少し考えたがもっと詳しく検討しよう。

レギオスの世界自体かなりの奇跡で成り立っている。何故ならあの世界はエルミ・リグザリオ失くしては出来得ないからだ。だがそれ以上に最も重要なことはエルミの夫ドミニオが死んだことだ。彼が死んだことによってエルミはイグナシスに復讐する気になり、ゼロ領域にイグナシスを叩き込んだのだから。イグナシスは違う亜空間の世界に行こうとしていたが、そのためには今いる亜空間に存在する全ての亜空間を壊さなければならない。亜空間同士の間には絶縁空間が在りそれが在る間は異なる規格の亜空間同士の行き来が出来ないからだ。そこを逆手に取りエルミは新しく亜空間：つまりレギオス世界を創ることによって、イグナシスを絶縁空間に閉じ込めることに成功したということだ。ならばもし、彼が生きていたのならエルミは復讐など思いつきすらもせず、そしてレギオス世界を創らずに何処かに消えただろうドミニオと。つまり彼には悪いが、レギオス世界が創られるためには、死んでもらわなければならないということだ。物語上イグナシスが殺したが、いくら原作とはいえ大まかな流れは変わらないが全くの変更がないわけでもあるまい。イレギュラーが居ることだしな。最悪この手で……まあ最終手段だ。そんな綱渡りはしたくない。もしオレが殺つたとバレればオレがゼロ領域で彷徨わされかねん。殺るなら慎重にかつイグナシスに罪を被せなければならぬ。……………何かまたフラグが建つたような気がしたが、まあこの話は置いておこう。

次に生き残るために重要なのは戦力だ。いくらこうして策を練ったってそれを実行出来なかったりしたら意味がない。取らぬ狸の皮算用だ。だがこれについては当てが有る。曲がりなりにも絶縁空間を生き延びたオレは正真の異民だ。何か異世界法則があるだろうとあたりをつけたのだが：全く無い：いや身体能力の向上だけしか確認出来ていない。原作では自分の願ったことのような法則になるらしいが、自分はただ死にたくないとしたそれ一点のみ思っていたオレの能力はなんだというのだろうか？まさか不死身だともいうのか？だが試す気にもならないし、あまりにも馬鹿馬鹿しい考えだ。ただ強く願っただけで叶う場所だとしても全く曲解もせずに亜空間増設機が受け取ったか怪しい。だが、おそらくそのようなことに準ずる異世界法則だと思う。不死身とはいかずともかなり死にくいとあたりをつける。そこまで考えて疑問に思う。あれ？微妙……。アイレインは身体能力向上はデフォで右目に本当の異世界法則が在る：これが主人公補正って奴なのだな。：主人公なんか大っ嫌いだああああああアアアアアアアッ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5070t/>

レジェンド・オブ・一般ピーポー

2011年8月5日23時30分発行